

古川先生の人間学

——長い間ありがとうございました——

矢野博

古川先生を語る前に、満70才の定年退職に対しての敬意と賛辞を申し上げたいと思います。

先生は、昭和28年に本学に奉職し48年の長きにわたり、学生の指導はもとより神奈川大学の教育、大学運営の中心としても大活躍をなさいました。

これらを語るには、古川先生の持つ素晴らしい「人間学」の存在を認めなければなりません。

常日ごろ私たちに話しかける言葉の端はしに、「知育」「徳育」「体育」の三位一体の教育論が十分に含まれていました。かと言っても古川先生は、〈聖人〉でも〈哲学者〉でもありません。ちよつと失礼かも判りませんが……。ありのまま（古川先生の間学・味）の個性で教員生活を送る中、多方面に渡って大きな影響力を発揮しています。我々教員仲間には……。大学の組織には……。学生の指導には……。

小生が本学に奉職した当時（昭和41年）古川先生の指導している体操部が全盛期の時期でした。全国大会に連続10回以上出場し、4回の優勝をはじめ7回もの上位入賞を果たしています。当時先生は、学生の前で当然のごとく率

先師範し、世に稀なほど生来持ち合わせている〈身体調整能力〉で学生をグングン引つ張っていく姿勢を見て、ただ単純に「オレについて来い！」ではなく、ときには酒を酌み交わしながら夜遅くまで談笑し学生の心を十分に汲み取った指導をしていました。その後ろ姿を毎日のように見ていた小生は、大いに感服し、いつかは真似をしようと思いに決めたものでした。

このことは「体操部」だけではなく、略歴に記したように「硬式野球部」、「ボクシング部」、「応援指導部」、「ゴルフ部」等の本学体育会の部長を歴任して、多くの優秀な人材、選手を社会に送り出し、彼らも十分に先生の「意」を十分に汲み取りあらゆる分野で活躍をしています。

また、競争社会の原点でもある〈スポーツ界〉においてはそれだけでは結果（良い成績）も求めることは出来ません。そこにもまた先生のもっている、「人間学（味）」が発揮されています。

多くの高等学校の先生方へ誠意の伝達、それに対しての高等学校側の期待、それを受ける寛容の大きさ、これら、何に一つとして欠けては良い結果は出てこないでしょう。

先生は、約700通以上もの年賀の交換をしているそうです。ここに古川先生の気配り、先輩・仲間に対する思い、後輩に対する姿勢、教え子・学生に対する期待が込められています。私たち後輩としても大いに学び、継承しなければと思っています。

さらに、先生は、大学紛争のさなかには、連日、連夜の教授会の中で教授会構成員の総意を受け、教務部副部長（のちに教務部長）として、多くの難問にも真っ向から立ち向かい問題の解決に奔走しました。

このように、組織体のまとめ役、推進役として多くの役職を歴任し、神奈川大学運営の担い手でもありました。

さらに、神奈川大学の枠を越え、全国の「体育・スポーツ界」とりわけ「体操界」において、幾たびかの表彰を受けております。

本当に長い間ご苦労様でした。ありがとうございます。

常日ごろかもしだす古川先生の「人間学（味）」中で、いつも先生の周りには多くの人達が集まります。それもまた、「親分肌」と一言では言い表せない人柄です。生来は大変な寂しがり屋だと思えます。いつも賑やかであり、話題の中、心的な存在でないと寂しいのです。

体育科の納会などで、その座が盛り上がらないと、自ら声量のある高い声で、演歌を歌い、独自の振り付けで踊り、一気にその座を盛り上げる不思議な力「人間味」があります。

我々にとつて、非常に喜ばしいことに《名誉教授》にもなられ、お住まいも近く、まだまだ神奈川大学との（絆）は切れません。体育科の共同研究室には3月まで座っていた椅子もあります。（いまでも誰が座っても落ち着かないようです・・・。）

どうか、これからも《腰痛》を友としながらも、大所、高所より我々を見守りつつ、ご助言をお願いいたします。第二の人生の出發にあたり、古川先生ご夫妻に大いなるエールをお送りします。